漢字文化圏試論(1)

深井　実

0　はじめに

中国が古い時代から周辺の諸民族に様々な文化を与えたことは論を俟たないが、特に漢字・漢語という言語面に限っても、日本・朝鮮・ベトナムの3国には量り知れない程の影響を及ぼしている[1]。この3国で使用される言葉のうち、6～7割程度の語彙が漢語で占められ、これなくしては普通の文章すら表現出来ない有様である。一例をあげると数をかぞえる時、1から10くらいまでは固有語のヒ、フ、ミ…でも間に合うが、365日とか平均株価の16,570円とかの大きな数を大和言葉でどう言ったらよいのか、頭を悩ます問題である。

従来この種の内容を扱かう際は、日本・朝鮮・ベトナムと国別に分けそれぞれの国での文化史を織りまぜながら漢字文化の受容・変遷を紹介するのが多かった。しかし、これは各国の国語学者が既に色々と試みていることである。我が国でも数多くの論文や著述が世に送り出されている。朝鮮やベトナムに於ても事情は同じである。また歴史の記述が多いとそれだけ言葉についての説明が少なくなるのも当然である。従ってこの小論ではこのような方法は採らない。具体的には国境を取りはずし、我々が日常多用する漢字や熟語を中心に字音・語形成・語義の3部門に分けて説明を行なうが、今回はまず字音についてである。

本来ならば漢字利用の言語現象をすべての面にわたって網羅すべきであ

ろうが筆者の能力からして不可能である。また以下に例示された漢語については現代語として不適切と思われるものもあろう。廃語扱いのものも当然ある筈である。しかし中国語を含めて４カ国語を列記するのが目的であるため辞典の片すみに埋れていた語を無理に拾い上げた場合もある。いわば木に竹と石と鉄を接ぐ観のあるのもやむをえない。中国語はともかく朝鮮・ベトナムという紹介されることの少ない言語との親近性について多少なりとも各位の理解が高められれば幸いである。

各言語の表記について、日本語は片かな、朝鮮語はハングルという固有の文字を使うから一見してすぐわかるが、中国語とベトナム語は共にローマ字を使用するため混同するおそれがある。そのためベトナム語はイタリック体を用いて区別する。また引用される漢語を表わす漢字も関係５カ国で事情が異なっている。北朝鮮とベトナムは今日漢字を追放しているので字体に関する問題はおきない。日本では常用漢字として新字体が使用されているが、必要に応じて旧字体が援用される。韓国ではいわゆる旧字体が、また中国では簡体字がそれぞれ使用されているなど様々であるが、この小論は日本語で書かれ読者も日本人を対象としているため新字体を４カ国語共通の字体として採用した。例えば日本で使う「対」は中国では对、韓国では對を用いるがすべて対で統一した。日本語の字音を片かなで表記する際は旧かなずかいを用いた[2]。入声音Ｐを示すフが残っていること、例えば当はトウよりタウの方が他の３カ国語と較べて類似性が高いこと、ジとヂ、ズとヅの区別のあることなどの利点があるからである。

１－０　予備知識

本論に入る前に音韻に関する予備知識をかかげる。

(1)　漢字文化圏論の出発点となる隋唐時代の中古漢語をＡＣと呼ぶ。
（Ancient Chinese の略）

(2)　ＡＣの音韻の分類基準として、４声、７音、36字母、４等呼がある

こと。

(3) 中国語とベトナム語には声調があること。

(4) ＡＣと現代４カ国語との間に見られる音韻対応の通則として

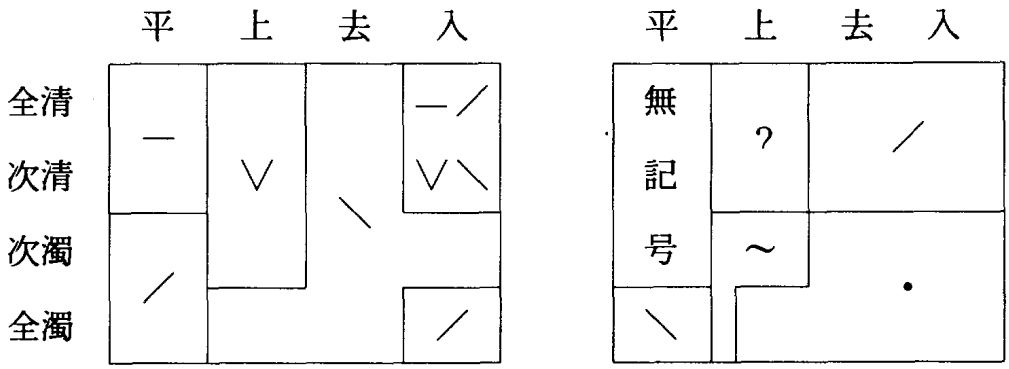
イ　入声字の -p、-t、-k は中国語にはなく、日本語では母音を添えてフ、ク、ツ、チ、キの形で残っていること。朝鮮語では -t が己に変わり、ベトナム語では -k が *-c*、*-ch* の２種に分れたこと。

ロ　陽類の -m は中国語では -n に、日本語ではンになったこと。-ng は日本語ではウ又はイと母音化し、ベトナム語では *-ng* と *-nh* の２種に分れたこと。

ハ　語頭に立つ ng は中、朝両語では失なわれたこと。

１－１　声　　調

中国語が研究対象になる時必らず声調を論じなければならない。結局、ここでは中越２語の声調について論ずることになる。中国語では古くは平、上、去、入の４声があったが、今日にいたるまでにその体系は可成変化してしまった。数の上では同じく４種あり、１声、２声などと呼ぶ。ベトナム語の声調は６種あり、それを５つの記号で区別する。つまり無記号が一つの声調表記をなしている。所がこの６種の声調記号を呼ぶのにベトナム語の名称はあるが日本語の訳語がない上に、６声調に一定の順序もなく辞典によっては排列順がまちまちで、この種の説明に困難を感ずる。そこで記号をつけない語の声調を便宜上「無記号」と呼ぶことにする。次に中国語音韻論で呼びならわされている用語で、中越２語の漢字音の声調分布を図示する。



中国語では全濁上声音が去声化したが、その現象がベトナム語にも及んでいることがわかる。この図を見ると中国より借用した漢字音の声調がベトナム語では整然と分布しているように思えるが、実際には相当の乱れがあり複数の声調を持つ漢字も珍らしくはない。例えば

頂　*đỉnh* と *đình*、　招　*chiêu* と *triệu*、　意　*ý* と *ỳ*

径　*kinh* と *kính* と *kỉnh*

1－2　両読文字

漢字は一個の字について複数の音が存在することが多い。単に呉音・漢音のちがいではなく、韻目の異なる音を持つのが普通に見られる。日常使用する漢字では出（シュツ、スイ）、易（エキ、イ）、度（タク、ド）など入声と去声所属の文字が多い。このように2種類の音を持つものを両読文字と呼ぶ。これらの文字はp、t、kの入声の外にかつてはr、d、gという韻尾をあわせ持ち、その韻尾がiやuにかわると共に去声の声調を持つようになったと考えられている。古い詩に伐、説、拝、憩が押韻している例があるため、拝、憩にもかつてはdのような語尾があったと推定されている[3]。説の字も遊説ではゼイと読まれる[4]ことは知る人も多いが、食（ショク）、積（セキ）をシと読むことは滅多にない。

出版　シュッパン　chūbǎn　출 판　*xuất bản*

出納	スイタフ	chūnà	출 납	*xuất nạp*
刺客	シカク	cìkè	자 객	―――
	セキカク	――	척 객	*thích khách*
比較	ヒカク	bǐjiào	비 교	*tỷ giảo*

較も国によっては2～3種の発音を持っている。比較という単語に固定されていても、ヒカウ、*tỷ hiệu* という言い方も併存する。
出が今日両読になっているのは日本語だけということになる。出納にスイダフ、シュツナフという読み方もあるが使用頻度はゼロに近い。

1－3　閉鎖音3系列－唇音、舌音、喉音

唇音とはACでp、p‘、m、b等唇が調音に関与して発せられる音のグループで、これら4声母を順に全清（無気音）、次清（有気音）、次濁、全濁（有声音）と呼ぶ。日本語では次清に相当する音がなかったのでp、p‘は共にパ行（後にハ行となる）で、mはマ行（後の漢音ではバ行）に、bはバ行で受け入れられたのである。朝鮮語ではpとp‘に相当するㅂ、ㅍがあるので、ACのpとp‘を正確に区別して受け入れられそうなものだが、どうゆうわけか無秩序にㅂやㅍを当てたため、対応に規則性がない。かつて朝鮮語にはㅂとㅍの区別がなく一つだったのでこの様な結果になったのではないかとも考えられている[5]。またbに相当する音もないため、p、p‘、bの3つがㅂとㅍに割り当てられている。mはㅁに対応している。ベトナム語ではACのp、bはすべて*b*が、またp‘は*ph*が対応している。全清と全濁の区別は語頭子音ではなく声調の区別へと変質した。つまりpで始まる漢語は6声調のうち無記号、？、／の高い声調のいずれかを、またbで始まる漢語は＼、～、．の低い声調のいずれかを持つに至ったのである。mは*m*に対応している。

以上に見た如く、借用に際しての受入れ側の対応は舌音（t、t‘、n、d）でも牙音（k、k‘、ng、g）でも基本的にはほぼ同じことが言える。勿論、

こまかい点では唇音3等字は後に中国語でもfに変り、それがベトナムでは*ph*や*v*が対応し、同4等字はベトナム語では舌音化し、牙音2等字は北方方言では口蓋化し、舌音にもそり舌の要素が見られるなど複雑な様相を呈してはいる。

特別	トクベツ	tèbié	특별	*đặc biệt*
秘密	ヒミツ	mìmì	비밀	*bí mật*
破戒	ハカイ	pòjiè	파계	*phá giới*
幕府	バクフ	mùfǔ	막부	*mạc phủ*
感動	カンドウ	gǎndòng	감동	*cảm động*
金銀	キンギン	jīnyín	금은	*kim ngân*

白駒過隙　ハックゲキをすぐ　bái jū guò xì
　　백구과극　　*bạch câu guá khích*

金と銀の字音上の相違は単に濁点の有無だけではない。ベトナム語の場合を考察してみよう。金は見母（k）侵韻平声3等字である。ACのkはそのまま*k*、侵韻iemは*âm*として現われる筈であるが*im*となったのは、後世になってから入った音によるものと考えられている。平声全清の声調は無記号である。（1－1　声調参照）　一方銀の方は疑母（ng）真韻平声3等字である。ACのngはそのまま*ng*、真韻ienは*ân*。平声次濁の声調は無記号。かくして現代ベトナム語の*kim ngân*は誕生した。日朝の場合も同様にして来し方を調べ上げることはほぼ可能である。

漢文や成句では我が国だけが訓読という他の言語には見られない読み方があるが、その部分は平がなを用いた。

付と附は字体も読み方もよく似ており、その区別がはっきりしない。元来、付は「あたえる」、附は「くっつく」の意であった。日本語では殆んど区別せず付が主に使用されている状態であるが、法律・官庁用語では附を用いることになっている由である。字音上、附は濁音、付は清音であるから区別は存在するが、共にフと読む場合が多く、相違は殆んど意識され

ない。中朝両語では附と付は全くの同音で区別がない。わずかにベトナム語だけが2音に相違があって識別が可能である。

交付	カウフ	jiāofù	교부	*giao phó*
付託	フタク	fùtuō	부탁	*phó thác*
附属	フゾク	fùshǔ	부속	*phụ thuộc*
附近	フキン	fùjìn	부근	*phụ cận*
附子	ブス	fùzǐ	부자	*phụ tử*

漢方、狂言でブスと言われているのは附子であるから附が濁音で読まれる例であるが、これも清音の仮名がふられたり付子と書かれたりして紛らわしい。

1－4　万葉仮名と朝越2語

奈良時代の国語には母音が8個あり、イ・エ・オの3段に2種の仮名のあったことが証明されている。例えばキの2種類であればキ甲、キ乙の如く区別し祇はキ甲に、奇はキ乙に当てられている。これは中国より入って来た漢字音そのものに区別があり、それに応じて万葉仮名を使い分けていたことによる。これを上代特殊仮名ずかいと言う。中国で作られた韻図を見ると甲の漢字は4等韻、乙の漢字は3等韻に分類されている。3・4等の区別は介音のｉに差があり、前舌的なｉを持つものが4等、中舌的なïを持つものが3等とされているが、我が国のみならず中国周辺の諸言語にも残っているという。

朝鮮語では牙喉音にその区別が残されている。例えば愆（3等）は건、甄（4等）は견。特に止摂ではその後に母音のｉがつずくため3等は-ïi、4等は-iとして残っていて、その例として祇はki、奇はkïiであると類書に記述されている。所が現代朝鮮語では祇も奇も共に기であるから、3・4等の区別のないことがわかる。おそらくは通時論的立場から古い語が対象とされている河野本からそのまま引用した結果であろうと思われるが、

「中世朝鮮語ではこうであった」と書くべきであろう。わが国の特殊仮名ずかいも「上代」という限定付きであり、万葉仮名と言えば現代語でないことは歴然としている。

ベトナム語では唇音について、3等字はそのまま *p*、*m* 等であるが4等字は舌音化して *t*、*d* 等になっていて、日朝越の3言語の中で最も際立った相違を見せている。4等韻の介母 i が強い口蓋化をおこした結果とされているが、例外も案外と多く特に票を声符とする漢字の多くは唇音のままである。

(イ) 舌音化しなかったもの：　漂 *phiêu*、綿 *miên*、餅 *bính*

(ロ) 3等字で舌音化したもの：　被 *tì*

(ハ) 唇音と舌音の両方を持つもの：　便 *biền tiền tiện*

（下線語が4等字）

人民	ジンミン	rénmín	인민	*nhân dân*
弊害	ヘイガイ	bìhài	폐해	*tệ hại*
琵琶	ビハ	pípa	비파	*tỳ bà*
匿名	トクメイ	nìmíng	익명	*nặc danh*
便宜	ベンギ	biànyí	편의	*tiện nghi*
童便	―――	tóng biàn	동변	*đồng biền*

1－5　歯頭音

中国語の si、ci、zi は母音が i であるにもかかわらずイとは発言されず一見奇異に感ずる。これはＡＣの声母が歯頭音の場合その母音はɯ（日本語のウに近い）と発音されるようになったのが原因で、それが朝鮮語やベトナム語にも反映している。我が国では呉漢音ともイ段で発音される漢字が、唐宋音ではウ段になるという変化がおきている。朝鮮語ではɯ音が伝えられた後内部の音韻変化により今日では아と発音され、ベトナム語ではɯに近い音 *ư* で表記されている。以下の例を見ればわかる通りシ、ジの音

を持つ漢字である。

獅子	シシ	shīzi	사자	*sư tử*
四肢	シシ	sìzhī	사지	*tứ chi*
私事	シジ	sīshì	사사	*tư sự*
刺史	シシ	cìshǐ	자사	*thứ sử*
孜孜	シシ	zīzī	자자	*tư tư*
辞典	ジテン	cídiǎn	사전	*từ điển*
字典	ジテン	zìdiǎn	자전	*tự điển*

実線を引いた部分は歯頭音であるが、朝越2語では正歯音2等の漢字（点線を施した部分）にまでɯ音化の影響が及んでいることがわかる。

1－6　ベトナム語の*h*と*v*と*d*

ＡＣの喉音を学習する際悩みの種がある。それは諸本で使われている声母の呼び名が複雑すぎるのである。清音の声母名として影母、暁母はともかくとして、次濁[6]3等の声母は喩母、匣母、云母、羽母、喩三、于類と6種類の名称が与えられているが、それなりの根據がある訳だから専門家はそれでいいとしても、初学者にはとてもわかりにくい。つずく次濁4等には喩母、羊母、喩四、以類と四通りの名称が併存する。更にもう一つの濁声母4等は匣母、胡類の2つの名称を持つ。このような呼び名で論ずることは混乱を招くだけであるから、喉音の中にはベトナム語で*h*、*v*、*d*で始まるグループがあり[7]、その語例だけを列記するにとどめる。この点朝鮮語の声母はㅎとㅇである。

陰陽	インヤウ	yīnyáng	음양	*âm dương*
栄誉	エイヨ	róngyù	영예	*vinh dự*
容易	ヨウイ	róngyì	용이	*dung dị*
越南	エツナン	Yuènán	월남	*Việt nam*
王位	ワウヰ	wángwèi	왕위	*vương vị*

血液	ケツエキ	xuèyè	혈액	*huyết dịch*
丸薬	グヮンヤク	wányào	환약	*hoàn dược*
玄学	ゲンガク	xuánxué	현학	*huyền học*

ベトナム語の学の字音 *hạc* は後世の音とされ、本来は *học* となる筈であった。漢字を借用した日朝越の３国では古形が残っており、逆に本土の北方音 xué は極めて変形してしまい、関連性が一目ではわからない程である。

喉音の声母には清音のｈとその濁音ɦがあると説かれている。日本語で育った者にはｈの濁音がどんな音なのかわかりにくい。この２つの音を持つ漢字が日本へ入って来てカ、ガ行で読まれるから、逆にカ行（呉音）はＡＣのｋ、ｋ‘の他にｈ、ガ行（呉音）はｇ、ngの他にɦに対応することになり、元の声母を知るのに苦労する。次に日本語の呉音とベトナム語の声調の関連を考察する。一般にＡＣのｈとカ行とベトナム語の高い声調が対応しɦとガ行と低い声調が対応するのが原則である。従って国語の清濁とベトナム語の声調の関係が大変わかりやすい。但しベトナム語の平声次濁音は高い声調であり、日本語では慣用音が多くて清濁の関係が逆転している場合もあるので注意を要する。例えば36声母の一つ、喉音所属の濁声母「匣」は当然のことながらゲフと濁点がつくが、普通は漢音でカフと読まれる。一方、清声母の「暁」は当然清音の筈だが慣用音のゲウが支配的である。

以上で声母を中心とした説明を終わり、順序としては韻母を取り上げることになるが、その数が多く筆者の手には負えない。そこで大まかな分類として立てられた中から梗摂だけを取り上げ韻母代表として若干述べることにする。

１－７　梗　　摂

摂とは韻目を大まかに分類した枠である。「広韻」の平声で東韻から凡

韻まで57韻あるが、似通ったものもまとめて16に分けその各々を摂と言う。そのうち -ng で終わるものが最初の東～江韻と後半の陽～登韻とに２分されて配置されている。ベトナム語の韻尾を見ると *-ng* と *-nh* の２種あることがわかる。入声も同様に *-c* と *-ch* の２つある。梗摂の -ng、-k が唐末から宋初にかけて口蓋性を帯びていたらしく、これがベトナムに移入されるに及んで前記の如く変化したものである。この現象は日本語にも認められ天台漢音で百千をハキセンと読む例があるという。朝鮮語でも韻尾 -ng、-k はそのままだが、その前に母音の ｉ が発生するという類似の傾向が認められる。（下線語が梗摂である）

生命	セイメイ	shēngmìng	생명	*sinh mệnh*
動脈	ドウミャク	dòngmài	동맥	*động mạch*
方策	ハウサク	fāngcè	방책	*phương sách*
景色	ケシキ	jǐngsè	경색	*cảnh sắc*

色は曽摂所属だが朝鮮語だけに -ik の語尾が見られる。

１－８　異　　例

「音韻法則に例外なし」とは歴史・比較文法の教える所だが、類推や近隣方言からの借用などによって、一見不規則な語形が現われる。所で漢語のように長い時間をかけて他民族に大量に借用されて行った場合、規則通りにならない事は当然のことと思われる。河野本、三根谷本ではＡＣと朝越２語との間に存在する音韻関係の通則を述べるとともに、異例として例外的な字音成立の理由を示している。それによると大半は類推で説明がつけられているが、中には日常語としてひんぱんに使われていながら全く不可解な例のあることがわかる。ベトナム語で数字の一 *nhất* 及び因を声符とする形声文字等全部で14文字の語頭の *nh* は特徴的異例とされている（因、姻、堙等はすべて *nhân*）。轟は借り入れた３国ですべて不規則な字音が今日定着している（ガウ、굉、*oanh*）。下線部が異例字である。

不逞	フテイ	bùchěng	불 령	*bất sính*
齧歯	ゲッシ	nièchǐ	설 치	*khiết xỉ*
印刷	インサツ	yìnshuā	인 쇄	*ấn loát*
宗教	シュウケウ	zōngjiào	종 교	*tôn giáo*
剰余	ジョウヨ	shèngyú	잉 여	*thặng dư*
推敲	スイカウ	tuīqiāo	퇴고 추고	*thôi xao*

日本語の場合、正規の字音は呉音・漢音・唐宋音で、それ以外は慣用音とされている。漢字は大部分が形声文字である所から、「字音が類推によって定められ中国の原音にない音が与えられたもの」というのがその定義である。しかしこの変則とでも言うべき慣用音が実に多く、それとは知らずに使っているのが現状である。

一つの漢字にA、Bの2音がありそれぞれの字義をa、bとすると、A＋a、B＋bが正しい組合せである。所で、何かの理由でこの漢字がaの意味では使われなくなると当然B＋bだけが残るわけだが、字音Aがそのまま慣用音として生き残り恰もA＋bが正規のものとして世上に通用する場合がある。

副はフクとしか読まないが、フ・フウという去声から生れた字音が漢和辞典に載っている。意味はフ・フウが「そえる、補助的」、フクが「切り裂く」であるが今日では後者の意味が失なわれ、前者の意味にフクが結びついている。そして多くの辞典ではフクは正しい音でありながら慣用音扱いされている。これは日本語だけの現象らしく他の3言語ではいずれも去声ゆかりの読みである。「広韻」には宥韻所属の文字の反切下字に副の字が使われている。入声を保存している広東語でも副は入声ではなく、「フゥウ」と仮名を振っている広東語辞典もある。副使は本来フウシと読まれるべき熟語であった筈である。

副詞	フクシ	fùcí	부사	*phó từ*
副使	フウス	fùshǐ	부사	*phó sứ*

中国語では失なわれた入声が日朝越の３国では残っているが、ここにも入声同志の混同という問題がおきている。日本語で一番多いのはｐ入声がッとなる例である。雑、湿、接は何れもフで終るが、そのような使い方は少なく、ツで終る用例が圧倒的に多い。

喫はケキ、キャクが正しいがこの読み方をすることはなく、キツが正しいと信じ込んでいる人が多いのではなかろうか。ベトナム語でも喫は*khiết*である。逼もヒキ、ヒョクと並んで慣用音のヒツが用いられている。漢和辞典を見ても用例は半々位である。冊も冊立、短冊ではｋ入声、冊子、一冊ではｔ入声と両様に使い分けられている。

雑誌	ザッシ	zázhì	잡지	*tạp chí*
逼迫	ヒッパク	bīpò	핍박	*bức bách*

逼迫にはヒッパクの他にヒョクハクという読み方もある。

１－９　干支について

中国から受け入れた様々な文化の中から、一まとまりとなって日常生活に根ずいているものとして干支をとり上げる。正しくは十干十二支と言い全部で22個の漢字よりなるシステムを以下に列記する。

甲	きのえ	カフ	jiǎ	갑	*giáp*
乙	きのと	オツ	yǐ	을	*ất*
丙	ひのえ	ヘイ	bǐng	병	*bính*
丁	ひのと	テイ	dīng	정	*đinh*
戊	つちのえ	ボ	wù	무	*mậu*
己	つちのと	キ	jǐ	기	*kỷ*
庚	かのえ	コウ（ママ）	gēng	경	*canh*
辛	かのと	シン	xīn	신	*tân*
壬	みずのえ	ジン	rén	임	*nhâm*
癸	みずのと	キ	guǐ	계	*quí*

子	ね	シ	zǐ	자	*tí*
丑	うし	チウ	chǒu	축	*sửu*
寅	とら	イン	yín	인	*dần*
卯	う	バウ	mǎo	묘	*mão*
辰	たつ	シン	chén	진	*thìn*
巳	み	シ	sì	사	*tỵ*
午	うま	ゴ	wǔ	오	*ngọ*
未	ひつじ	ミ	wèi	미	*mùi*
申	さる	シン	shēn	신	*thân*
酉	とり	イウ	yǒu	유	*dậu*
戌	いぬ	ジュツ	xū	술	*tuất*
亥	い	ガイ	hài	해	*hợi*

朝鮮語の丑축は慣用音で、本来の字音は추である。ベトナム語では一般に十二支には古い音が使われていると言うが、子、未本来の字音は *tư*, *vị* である。

壬申の乱　ジンシンのラン　(672年)

辛亥革命　Xīnhài gémìng　(1911年)

壬辰倭乱　임진 왜란　(1592年　文禄の役)

（以上で第１部の字音篇は終り、以下次号以降順を追って掲載の予定である。）

（注）

（1）第２次大戦後、朝鮮半島では韓国と北朝鮮の２国が分断されたままになっており、国家の名称も別々になっている。ＮＨＫが語学講座を開設するに当たり言語の名称決定に曲折があり、ハングル講座として放送開始にこぎつけた程であった。しかし漢字文化の成立には長い歴史があり南北の区別は本来なかったのであるから、本稿では言語・民族・地域の名称として「朝鮮」なる

語を使用する。但し現代語では若干差異があるため、特に区別する場合には韓国、北朝鮮と別けて用いる。

（2） 国語の字音は漢和辞典によって呉音・漢音・唐宋音・慣用音等の区別が著しく異なっているのが現状である。ためしに2～3冊の漢和辞典を開いて同じ漢字の音を比較してみるとすぐにわかることである。そのため本稿では「大漢語林」（初版、大修館書店）を用いることにした。

（3） 「中国文化叢書　1　言語」（大修館書店　昭和42年）　P49

（4） 字音の相違が語義の相違に及ぶ場合については、第3部の語義篇で取り上げる。

（5） 本稿は次の2書を可成の程度参考にしてはいるが、引用の都度出典を明記することは行なわない。

河野六郎　「朝鮮漢字音の研究」（著作集2巻　平凡社　1979年）

三根谷徹　「越南漢字音の研究」（東洋文庫　1972年）

以下、河野本、三根谷本と呼ぶ。pとp'の混乱については河野本　P415

（6） 韻鏡などでは清濁という用語が使われているが、本稿では次濁と呼ぶ。日本語の濁点の有無による清音・濁音を清濁と呼ぶことからおきる混乱をさけるためである

（7） 4等唇音字が舌音化して生じた *d* は除く。